

## シンポジウム 『～子どもの育つ場から～』

司会者：清水將之氏（関西国際大学/人間学部教授）、泉本雄司氏（あすなる学園/医師）

シンポジスト

＜高瀬 利男氏＞

情緒障害児短期治療施設  
「横浜いずみ学園」園長/医師

情緒障害児短期治療施設（以下、情短）へ入所している児童の被虐待児の比率は、他の児童福祉施設と同様に年々増加していますが、子ども達の個々の問題は様々であっても“親との絆が上手く保てずに非常に辛い幼年期を過ごしてきた”というのが大体共通しています。そして“自分のこういうところがいけないから親と上手く行かない”と思っている被害者である子どもたちを入所させ、“本来なら治療が必要な親御さんたち”に変わって育ちの援助をしております。

被虐待児は人との関係がなかなか上手に作れないという特徴があります。従って生活の場の関わりが最も大事になってくるわけです。子どもたち同士、楽しく遊ぶ、あるいはケンカ、いじめたりかばったりという日常生活の中に指導員やセラピストが入って粘り強く細やかに支えて関わり、生活の場の改善をし、子どもたちの成長のし直しを援助していきます。「医療」は子どもが安心して生活していく下地をつくる黒子となって支える方がいいんじゃないかと思っています。

いずみ学園から家に帰れる子どもが少なくなり、子どもたちの自立を支援しなくてはならなくなりました。どうしても至れり尽くせりになりがちな施設の中では自立支援は難しく、分園を作ることになりました。地域での役割、どのように協調したら良いのかを実際に悩んだり迷ったりしながら指導員に援助を求めることで、

より自立を現実的なものとして成長してもらいたいと思います。

情短では、治療が入園期間中に完結することはありませんので、いずみ学園ではH11年から通所部門を始め、親御さんを含めたアフターフォローをしております。子どもさん達も親御さん達も、職員との関係ができていない入所間もない時期から虐待の体験や子育ての苦勞を話されるよりも、自然の流れの中で関係が深まった後、子どもの場合は退園後のフォローの中でそういった辛い経験が話される方が予後は良いと実感しております。退園して25歳を過ぎてから相談に来て、精神的な治療を開始したこともありますし、退園児と入園児、職員と一緒にフットサルをするなど、退園した後も遊びに来れるような雰囲気のある、子ども達にとって1つの故郷みたいな施設作りの大切さを感じております。

＜市川 太郎氏＞

東京国際福祉専門学校講師

私自身16年間児童養護施設で暮らしましたので、児童養護施設で暮らすということ、その立場から紹介が出来ればと思います。私は、2歳頃に入所したということですが、全く記憶にはありません。しかし、いつかはそこで暮らすことを納得せざるを得ない時期がきます。

小学校の中～高学年になると、普通の学校に行って友達と付き合っていると、自分は違うところにいるんだなと気づき始めます。そして「何で自分がここにいるんだろう」という疑問が出てきます。この時、何で施設にいるかという説明をどこかできちんと受ける場所が必要だと思